

その他

なぜ、「単位の実質化」が問われるか

土持 ゲーリー 法一*

はじめに

中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』（2005年1月28日）「第3章 新時代における高等教育機関の在り方」の学士課程「カリキュラム、単位、年限」において、「単位の考え方について、国は、基準上と実態上の違い、単位制度の実質化（単位制度の趣旨に沿った十分な学習量の確保）や学習時間の考え方と修業年限の問題等を改めて整理した上で、課程中心の制度設計をする必要がある。」として「単位制度の実質化」を促した。これは、大学における教育および研究の質の向上を提言したものである。現状では、単位制度の基準と実態の間に齟齬があるとして、単位制度の見直しを提言した。

単位制の歴史

単位制度は、もともと、ハーバード大学において選択制が導入されたことに端を発したものである。1869年、エリオット総長は、「19歳、20歳の青年は、自分が何を好み、何に最も適しているのか知らなければならぬ。」と主張して、従前の必修科目制を廃し、自由選択科目を導入した。それまでのアメリカの高等教育機関は、ほとんどがヨーロッパの制度に共通の比較的固定化された必修科目カリキュラムの形態に従う傾向にあった。エリオットは、学生が足並み揃えて同じ科目履修するのは、あたかも「兵士の行進」であると揶揄して、選択の自由のなさを批判した。すなわち、アメリカにおける単位制は、自由選択制が導入されたことによる必然的な帰趨であって、選択制によるカリキュラム自由化の副産物であった。

1 単位の規定については、19世紀の終わりから1900年代初期にかけて、アメリカの各大学で共通となり、大学のカatalogには各科目の単位数、そして1週ごとの教室や実験室での時間数が記載され、学位の取得要件は履修単位数で規定された。たとえば、ワシントン大学（セントルイス）では、1902年以降、学士号の学位の単位履修要件がCatalogの中で記載され、翌年から「クレジット3単位」が学科目の頭に付けられ、1908年から各授業科目に付けられた。1903年3月の学部議事録によれば、「平均的な学生の場合、（1単位は）授業や講義の1時間は約2時間の準備を必要とし、2時間の実験は1時間の準備を含むことを想定する」と記録されている。すなわち、アメリカの大学における単位制は、長い歴史の実績を踏まえたものである。

戦前日本の大学でも単位制度が存在した。たとえば、「大正9年の大学令公布に伴う大学教育の変革までは、帝国大学では学年制を採用していたが、それ以後は、多くの官公私各大学で単位制度が採用されるようになった。この制度では、講義、実験、実習ごとに一定の時間数を単位として授業時間数を計り、学科目ごとに授業量を表す単位数を定め、所定の条件の下に、所定の単位数以上の学科目の学習を修了すれば、学科目に関する限り、卒業資格が得られることになっていた。所定の条件については大学によっていろいろの差異があったが、学習の修了認定はほとんど共通的に、主として学期末あるいは学年末の試験の成績によっていた。」というものであった。戦後との違いは、旧制度では授業科目の単

* 弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室

位数は、授業時間から算定されたのに対し、新制度では平均能力の学生が学科目の学習のために費やす標準的時間から算定され、学習が教室内でなされると否とに関わらず、毎週3時間15週の勉強活動を1単位としたことである。

単位制が導入された理由は、旧制大学の「詰め込み主義を基礎とする監督教育」を除去し、旧来の受動的学習から解放して、自学自修を奨励することで、勉強への自発性を振起させるねらいがあった。たとえば、単位制の導入に直接にかかわったC I & E教育課高等教育班イールズは、「日本では学生は教室でじっと座っている。先生は土びんから水を注ぐように上から知識を注ぎ込む。後から後から注ぎ込む。一杯になるまで注ぎ込む。場合によっては受入れるものが一杯になってもまだ注ぎ込む。日本の学生は湯呑みのように扱われている。」と諷刺的に批判した。

なぜ、単位制が形骸化したか。一つは、新制大学の改革を審議した教育刷新委員会の指導者が、単位制についての認識を欠いていたからである。彼らの議論は、「単位制」ではなく、「科目制」であって、単位制に消極的な態度で臨んだ。たとえば、東京帝国大学の学部長会議では、単位制に反対する意見が飛び交い、単位制では「人物養成」ができないと反対するなど、認識のなさを露わにした。

単位制の運営にも問題があった。伝統的な1コマ(=2時間)の連続講義ではなく、1時間の講義を週に何回か繰り返して行うことが、アメリカ式「単位制」を導入するうえで不可欠な要素であったにもかかわらず、これが看過された。イールズは、「教官の毎週受持時間数は旧制大学におけるよりも多くしなければならない。」と「教官」の週あたりの授業回数を増やすことを授業改善の一つとして提言したが、これも看過された。「単位制」という新しい概念は、日本の伝統的な風土に定着せず、混迷を極め、結局「学年制」に「単位制」を上乗せした中途半端なものになった。単位制の形骸化は、新制大学のスタートから危惧されていた。〔詳細は、拙著『戦後日本の高等教育改革政策―「教養教育」の構築』(玉川大学出版部、2006年)を参照]

なぜ、「単位の実質化」が問われるか

大学の大衆化により「学力低下」が顕著になり、教育・研究の質の向上が求められている。今後、全入時代になればより深刻になり、従来のような教員の一方的な講義中心の授業形態では、学生がますます理解できなくなる。

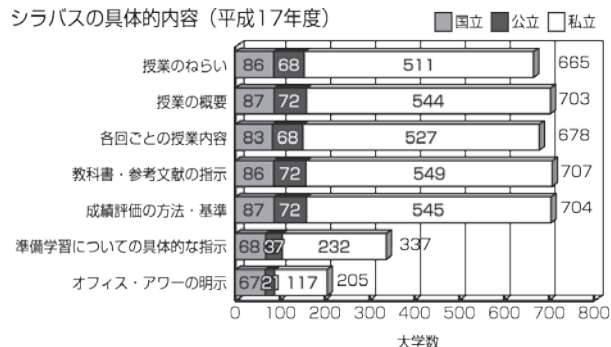
一方、社会でも多様な人材、とくに主体的に活動できる人材が求められるようになり、大学における授業形態の変革を促し、講義中心から課題中心の能動的学習を促進することになり、単位制度の実質化が問われるようになった。

どう対処すべきか

単位制度については、2007年度『21世紀教育科目履修マニュアル』に詳細に記されている。これは、タイトルからも明らかなように、学生が科目履修するためのマニュアルである。しかし、大学評価基準では、単位制につながる「授業時間外の学習時間の確保」や「学生の主体的な学習を促し、十分な学習時間を確保するような工夫」は、大学側や教員側に求められている。すなわち、「マニュアル」は、学生だけでなく教員自らも履行する必要がある。1単位は、15時間ではなく45時間であって、授業時間外の30時間の課題をどう学生に与えるかが問われる。

文科省によれば、平成17年度シラバスの作成状況は100%に達しているが、具体的内容については、以下のデータ「準備学習等についての

シラバスの具体的内容(平成17年度)



具体的な指示」のように、極端に低いことが明らかである。

基準上では、講義のために2倍の準備時間が学生に課せられているのであるから、この時間を有効に活用した授業方法の工夫・改善が求められる。

まとめ

教員が、ティーチング・ポートフォリオ（教育実践記録）を作成し、授業を省察することを通して授業シラバスを見直し、能動的学習を促すような授業シラバスへと改善することが、「単位制度の実質化」に繋がると思われる。

〔詳細は、拙著『ティーチング・ポートフォリオー授業改善の秘訣』（東信堂、2007年）を参照〕

（備考：『21世紀教育センターニュース』より転載）